

特集 働く

熊本で働く。それには、さまざまなメリットがあります。
 「通勤時間が短い」「親元で安心」「住環境が良い」など。
 「熊本ならではの」豊かさは多彩です。
 もっと豊かに。もっといきいきと。
 いろいろな人が熊本で輝いて働くとはどんなことでしょうか。
 7つの視点、「県民」「女性」「障害者」「高齢者」
 「働く人々」「若者」「子どもたち」から熊本で「働く」ことを考えてみました。



女性にとって



男女の能力差を感じない。
 感じさせない。

「左官さんになりたい！
 今どきの女の子。」

ここは、ビル建設現場の六階。ヘルメットをかぶった女の子が二人、男の人たちに混じって、壁塗りにせっせと精を出しています。彼女たちの職業は「プラストコーディネーター」。新しいカタカナ職業と思いきや、いわゆる「左官業」。山下恵美さん（二八）



「女性だから」という言い訳は通用しない。

と平本恭子さん（二六）は、全国でも数少ない女性の左官さんです。

「小さい頃から建設業に憧れてたんです。事務職みたいに机の前でじっとしているのは苦手。体を動かす仕事が性に合ってる」。山下さんは、高校卒業後、熊本市内の建設会社へ就職を希望。両親ははじめ猛反対でしたが、同級生たちが短大や事務職へと進路を決めていく中でも、山下さんは意志を曲げませんでした。一方、平本さんも「学歴でなく、実力がモノを言う仕事をしなかった」と、この道へ。

モルタルなどの材料を混ぜ合わせるには大変な力が要ります。「やっぱり、男にはかなわないな」と山下さん。でも、誰も見ていないところで、こつこつと材料合わせに挑戦しています。山下さんの夢は、「二級技能士を取る」と。そして、いつかは両親のために、家を建ててあげること。平本さんは「左官をしている父さんよりうまくなること」を目指しています。二人の夢は、日々確実に近づいていくようです。

県民にとって



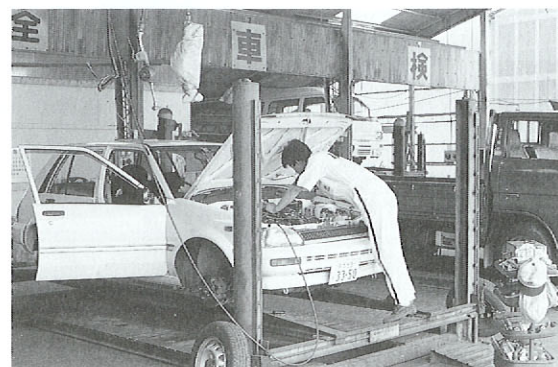
「ゆとり」が
 明日への
 エネルギーとなる。

労使一体となって知恵を絞り、
 豊かでゆとりある生活をつくろう。

これまで仕事一辺倒でやってきた日本。しかし、人々は、次第にゆとりある生活を求めるようになり、企業の側にも労働者の健康や人材確保などの面から、労働時間の短縮についての理解が浸透してきています。労働基準法も改正され、週四十時間労働制へ向けて段階的に短縮することになっています。熊本県ではこれに呼応し、様々な取り組みを行っています。

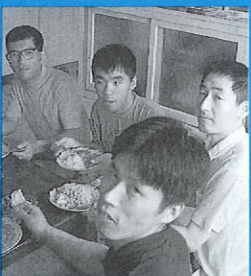
その一つが「豊かでゆとりある社会のために」と題したビデオ。どのようにして「労働時間の短縮」を実行したらいのか分からないという企業のために、その方法を分かりやすく説明したビデオを作成しました。

ビデオの中では、五つの成功事例を紹介しています。部品の置き場所や作業の位置を改善することで無駄な動きをなくした自動車整備工場。四週六休カレンダーを作成し、機械を導入する



オイルホースなどを天井からつるしたので、足元すっきりし、作業効率も高まった。

障害者にとって



持てる能力で
 社会に貢献する。

共同生活をしながら、
 働き、自立をめざす。

「自分の力で生きたい」。これは誰もが願うことです。精神薄弱者授産施設ゆきぞの学園の吉田福徳さん（三二）、下田久さん（三六）、福田史孝さん（三三）、福山誠二さん（二八）の四人は、四月から下益城郡砥用町内に家を借りて、「グループホーム」を始めました。「グループホーム」とは、精神薄弱の人たちが共同生活をし、助け合いながら、自立した生活を送ることを援助する制度のことです。

「グループホーム」をするには、就職が第一条件。生活費は自分たちで稼がなくてはなりません。四人はこれまで、実習でいろいろな仕事を経験してきました。しかし、今度は自分たちの力で、生きるために働くのです。吉田さんは製材所、下田さんはゆきぞの学園、福田さんはタオルメーカー、福山さんは車の整備工場に働いています。就職してから四カ月、上司から「夕



障日向なく働く姿は、職場でも評判だ。

オルの種類のことなら福田さんに尋ねなさい」と、言われるまでに信頼されるようになりました。「グループホーム」を始めてから、目がイキイキしてきたようです」と、四人を見守るゆきぞの学園の熊本保孝事務局長。仕事は「きついで頑張る」と、最年少の福山さん。「働くことが、自立の証なんだ」。四人の目は、そう言っているかのように自信に溢れています。